

決定疑問文に対する答え方について — 医療相談を資料とした場合

小沼 喜好

1. はじめに

本発表では、医療相談を資料として、決定疑問文に対して返答する場合にどのような言語ストラテジーが用いられているのかを考察する。

各言語には、その言語を使う人間が自分の意見や考えをどのように表現し、どのような順番で述べていくべきかという言語ストラテジー・言語方略と呼ばれるものが存在している。この言語ストラテジーは各言語で異なっていて、ある言語での言語ストラテジーは別の言語の母語話者から見ると時には滑稽だったり、回りくどかったりする。したがって、日本語の言語ストラテジーは異なる言語の母語話者から時には誤解を受けることもある。例えば、朱中国首相は日本人の話し方を「儀礼的、前置きが長い、要領得ない（1998年11月23日 朝日新聞）」と否定的に受け取っている。

また、同じような意見を英国のサッチャー首相も述べている。

ある自民党の幹部が、はるばる英国のサッチャー首相（当時）を訪ねたときのこと。握手のあと、幹部は長々と時候のあいさつを述べ、ついで英国の素晴らしさをたたえて、いつまでも本題に入ろうとしない（本題などなかったのかも知れないが）。いらしたサッチャー首相、ついに『アイム・ビジー（私は忙しいのよ）』と一言さつと部屋を出ていったという。つまり、朱首相の感覚が特別なわけではない。

（1998年11月25日 朝日新聞）

またアメリカ人との英語での会話の中で日本語のストラテジーを用いて返答したために簡単な英語さえわからないのかという誤解を受けてしまった例もある。

American: What is the major discipline problem in your school?

Japanese: Our school is an old school. It was established about fifty years ago...

[中略] アメリカ人が期待した会話の流れ

American: What is the major discipline problem in your school?

Japanese: We don't have any major discipline problems at our school.

American: What is the biggest problem?

Japanese: Oh, things like coming to school late, or not doing homework.

（佐野・水落・鈴木 87-88ページ）

各言語の母語話者は、母語でのストラテジーで外国語のストラテジーを理解し、誤解したり、摩擦を引き起こしたりする。これに対して、次のような意見がある。

宇佐美「[前略] もう少し、外国人の話す日本語に対して寛大になる、彼らなりの日本語というものを認める、という姿勢がこれからは必要になってくると思いま

す。」

ネウストブニー「それは非常に難しいことですよね。私の知っている経験の長い日本語の教師でも、学生が敬語を間違えると『いやな学生だ、生意気な学生だ』というようなことを言ったりしますからね。」（宇佐美 290ページ）

ある言語での発話は母語話者にはその言語でのストラテジーで否応なく理解されてしまうのである。したがって外国人が日本語を自分の母語のストラテジーで用いたならば、言語学的な訓練などの特別な訓練を受けていない日本語母語話者は、その日本語を日本語のストラテジーで理解してしまい、誤解する恐れがある。また「寛大になる」とは一体どういうことなのであろうか。「寛大」とは、相手の弱みや欠点を理解した上で相手の言動を許すことであると思うのであるが、周りを見回してみると往々にして「寛大」という名のもとで「外国人だからどうでもいい、いちいち反応していたのでは面倒なので放っておく等々の態度」が見られるのである。

2. 疑問文について

疑問文とは何なのかを考えるために、南（123ページ）の「質問文」を援用する。南の「質問文」という表現は、本稿での疑問文と同じものである。南は質問文の基準として、

- a 相手がいることを前提とした言語表現であること
- b その相手に対して、なんらかの問題を提示し、それについての情報の供給を要求する言語表現であること
- c その要求に応じた、相手からの情報の供給に関するなんらかの表現が考えられるものであること

を挙げている。そしてこの基準に従って、

- 1) 通常質問文（英語での yes-no question, wh-question）
- 2) 問い返し文
- 3) 念押し文、英語では tag-question

を質問文とし、上記の三つの条件をみたさない、ひとりごと、発見、反語表現、勧誘表現等を質問文から排除している。

南が分類した質問文の中で、本稿の決定疑問文と関連するのは「確認質問の単純質問」である。その例として、

1. キノウBサンニ会イマシタカ？
 - 1-1. ハイ、会イマシタ。
 - 1-2. イイエ、会イマセンデシタ。
 - 1-3. アイニク、ホカニ用ガアリマシテ・・・
2. アイニク、ホカニ用ガアリマシテ、アイマセンデシタ。（小沼）

が挙げられている。質問に対する返答に、「はい/いいえ」での答え1-1、1-2と「はい/いいえ」の出て来ない返答1-3がある。そして、1-3は2のように補うことが出来る。

次に、この南の考察を踏まえ、実際の資料を分析する。

3. 分析対象の医療相談

分析対象の資料の中に「はい/いいえ」で返答がなされる例は見られなかった。つぎの表は分析結果であり、質問に対する返答がどこに出て来るか、その返答は肯定か、否定かによって分類したものである。

返答が初めに出て来る例数は、来ない例の半分である。また「結論から申しますと」という表現で返答が始まった例があり、このメタ表現が示すように返答が初めに来る例は、日本語では有標となる。

医療相談の例	肯定	否定	留保・曖昧	合計
答が初めに出て来る例	11	0	1	12
答が途中に出て来る例	14	3	2	19
答えが最後に出て来る例	3	0	2	5
判断しにくい例	—	—	3	3
的確な答えのない例	—	—	2	2
合計	28	3	10	41

返答の例としては、次のようなものが挙げられる。Qは質問、Aは返答を示す。

1. Q 長年高血圧で悩んでいます。良い漢方薬はありますか。

A 高血圧に効果のある漢方薬は何種類もあります。

2. Q レーザーで治せますか。

A 赤い色専用のレーザーを使用すれば治ります。

3. Q これを除去すれば治るでしょうか。

A 結論から申しますと、治るかどうかが判断できません。

返答が初めに来ない場合には、まず「前置き」が来る。「前置き」には、全体的構造での「前置き」と局所的構造での「前置き」がある。全体的構造での「前置き」とは、ある一つの言語行動全体から見た場合の「前置き」で、日本語での言語行動「①近づく ②切り出す ③用件をすます ④しめくくる ⑤離れる（例解新国語辞典付録22、23ページ）」での「②切り出す」に表れる。局所的「前置き」とは、各言語行動の内部に見られるものであり、最小のものとしては、文レベル、例えば接続助詞「が」で終わる文が挙げられる。

「前置き」の働きは、

- a) 相手が、これから話す話題についてあまり情報を持っていないと想定し、ある程度の情報を与えようとする働き
- b) じかに本題に入ることを回避する働き
- が挙げられる。そして、「前置き」には、
- a) 質問のなかにある語彙・表現を繰り返す場合
 例：ステロイド→ステロイド剤の効能
 アトピー→アトピーの説明
 遠視→遠視、近視、乱視の説明。遠視の説明
- b) 返答をする人間が説明のために必要だと思われる事項を自ら選んで使う場合
 例：0→超音波、超音波使用の脂肪吸引法
- がある。

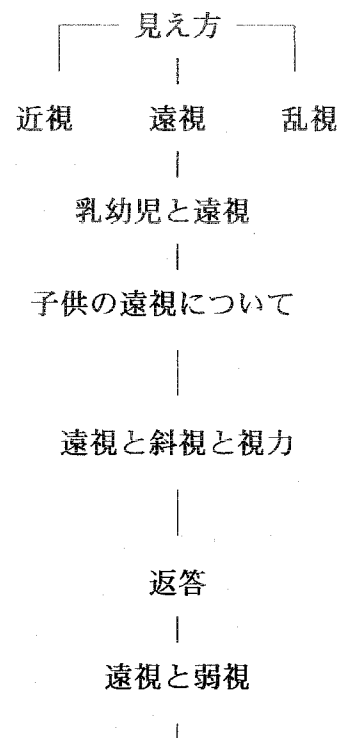
次に、実際の資料を質問—返答の構造に注目して分析した結果を示す。網かけの語句は質問の中の鍵概念、ローマ数字は段落番号、丸中数字は文番号を示す。右側の系統樹はテキスト構造を示す。

質問

- I ①小学1年生の長男が視力・右A・左Cで遠視といわれました。
- ②遠視は、遠くはよく見える目だと思っていましたが、眼鏡は必要ですか。

答え

- I ①人間の目の見え方には近視、遠視、乱視があります。
- ②生まれたばかりの赤ちゃんはほとんど遠視で、成長とともに6～7歳までに正視になるといわれています。
- ③そのため、年少児には遠視が多いのです。
- II ④子供の遠視で気をつけなければならないのは、遠視が原因で視力や両眼視が正常に発達せず、弱視や斜視になる場合があります。
- III ⑤精密検査の結果で、裸眼視力が良くて斜視がなければ、そのまま経過をみることになりますが、質問の方は遠視で視力A (1.0以上)・C (0.7未満) ですから、斜視がなくても眼鏡を使用した方がよいかわかりません。
- IV ⑥左右の遠視度の差が大きければ、弱視の発生も否定できないので、定期的に視力検査をうけてくだ



さい。

V ⑦遠視の人は、遠くは良く見えても調節による遠視が隠れていることがありますので、近くを見る時、近視の人より疲れます。

隠れ遠視

⑧そのため、子供でも眼精疲労、頭痛、読書嫌い、根気がないなどの症状がある時は、眼鏡をかけることがあります。

眼鏡をかける症状

VI ⑨視力、眼位、眼鏡の調整などの経過観察が必要ですが、前にも述べた理由で、成長とともに遠視はだんだん弱くなっていくと思います。

遠視のさらなる説明

4. まとめ

本稿で分析した医療相談の資料では、会話分析での隣接ペアとは異なり、質問に対して返答がすぐには来ないのが普通である。そうすると質問に対して即座に「はい/いいえ」で返答する言語の母語話者が自分の言語のストラテジーを日本語へ持ち込み、即座に返答したならば、日本人は性急すぎるとか、直接的すぎるとかのように否定的に受け取ってしまう恐れがある。したがって日本語教育をする際に、ある場面ではまず前置きをしてから返答をするのが普通であると教えることで日本人との不必要な摩擦が避けられる。勿論、教える際には何を前置きとし、その後どのように話を進めていくべきなのかというモデルを示さなければならない。

参考文献

宇佐美まゆみ、『言葉は社会を変えられる』（明石書店、1997）

ザトラウスキー・ポリー、『日本語の談話の構造分析 — 勧誘のストラテジーの考察 —』（くろしお出版、1993）

佐野正之・水落一朗・鈴木龍一、『異文化理解のストラテジー』（大修館、1996）

西江雅之、『ことばを追って』（大修館書店、1989）

南不二男、『現代日本語研究』（三省堂、1997）

例解新国語辞典（三省堂、1990）

Günthner, Susanne: The negation of dissent in intercultural communication - an analysis of Chinese-German conversation. 4th international pragmatics conference. Kôbe Japan, 1993.

資料

朝日新聞

常陽ウィークリー

常陽リビング